地域活動の新たな参加者

2003年に東北農政局が、優れた村づくりを行っている地区を対象に実施した「地域の暮らしに関するアンケート調査」によれば、地区の結束力が10年前と比較して「強い、または維持されている」と回答した地区では、その理由の第1位は「兼業農家や非農家も増えているが、地域の共同活動に積極的に参加している」(回答割合59.4%)であり、一方、「弱まっている」と回答した場合には、その理由の第1位は「人口の減少や高齢化により、地域の共同活動の維持が困難になった」(66.7%)と「兼業農家や非農家が増え、地域の共同活動の維持が困難になった」(66.7%)であった。これまで農村の共同活動の中心であった農家の減少と兼業化の進展、そして非農家の増加が多くの地域でみられる現状にあって、兼業農家や非農家が地域の活動にどの程度参加するかが、地域の結束力そして地域の活力を左右する大きな要因であることがうかがえる。

地域活動の新たな参加者として兼業農家や非農家を考える上で、農家の農外就業の子弟が活躍している事例を紹介したい。筆者がこの夏訪問した上鹿妻第一地区協同組合は、盛岡市の市街地から車で15分ほどの3集落を管内とする集落組織である。前身の農事実行組合は農協組合員のみが構成員であったが、20年ほど前の農事実行組合での検討の結果、「農家の子弟など農家でない人も組織に入らないと将来的に地域のまとまりがなくなる」と考えて、地区の全世帯約70戸が加入する組織とし、名称も地区協同組合に変更した。この組織については『農中総研 調査と情報』9月号に執筆したが、注目されるのは、農家の子弟で農業に従事していない人たちがこの組織の青年部に入り地域活動の中心として活躍していることである。青年部は「農リンピック」という、休耕田を使い伝統的農法の伝承と田んぼで遊ぶことを目的とした地域の運動会を企画・運営し、また祭りでは神輿を担ぎ、堰の草刈や農薬の共同散布も行っている。地区協同組合の設立以前には、農家の子弟ではあるが会社勤めのため農業や地域の活動とは関わりを持たずにきた人たちが、子育てや仕事が忙しいなか、青年部に参加し、集い、語り合うことで、互いの考えを理解し、農リンピックや農薬散布など農業に関わる活動も行うようになったという。また、青年部の施設3棟を部員だけで建設しているが、これは建設業を始め様々な職業の者が青年部に集まったことの効果といえよう。

昭和一けた世代のリタイアにより農家の農業従事者は今後急減するとみられているが、本号の内田主任研究員の論文によれば、昭和一けた世代の子どもの世代は、農業との関わりは小さくても今後も比較的安定的に存在すると見込まれている。前述の上鹿妻第一地区協同組合の例でも農家の子弟が地域に積極的に関わることで地域の活力につながっている。彼らの動向をあらためて注視する必要があるだろう。

(注) 農水省「豊かなむらづくり表彰」で、東北ブロックの優良事例に表彰された地区。

((株)農林中金総合研究所 調査第一部長 斉藤由理子・さいとうゆりこ)